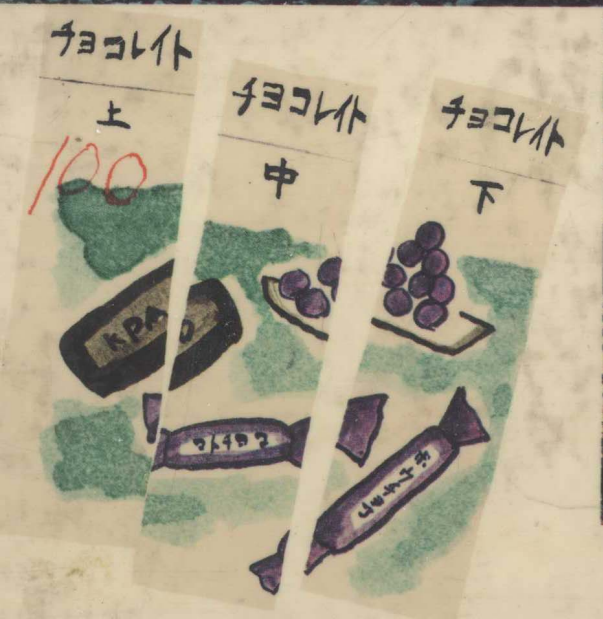
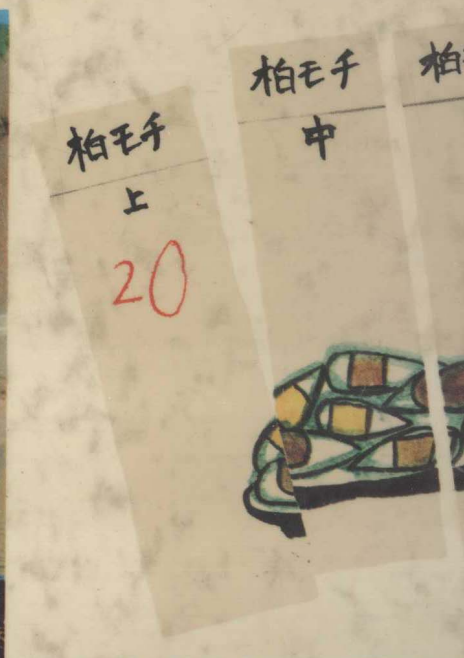


お父さんが子供で戦争のころ

●学童疎開日記●

明村 宏



お父さんが子供で戦争のころ

●学童疎開日記●

明村 宏





小学5年生当時の著者

著者略歴
ちよしやひろし

あけむら

ひろし

明村 宏

昭和八年、東京生まれ。

昭和十五年、昭和国民学校（現昭和小学校）に入學、都立第五中学、

都立小石川高校、成城大學を経て、

日本食糧株式會社勤務。三児の父

親。

現住所（☎一八二）東京都三鷹

市井頭二の二〇の二四

お父さんが子供で戦争のころ

定価 六五〇円

昭和四十七年三月二十日印刷

昭和四十七年三月三十日発行

著者◎明村 宏

編集人 宇野 嘉彦

発行人 朝居 正彦

発行所 毎日新聞社

☎一〇〇 東京都千代田区一ツ橋一

☎五三〇 大阪市北区堂島上二一三六

☎八〇二 北九州市小倉区紺屋町一三

☎四五〇 名古屋市中村区堀内町四一

印刷 共同印刷
製本 大口製本

< 検印省略 >

8036-552003-7904

はじめに

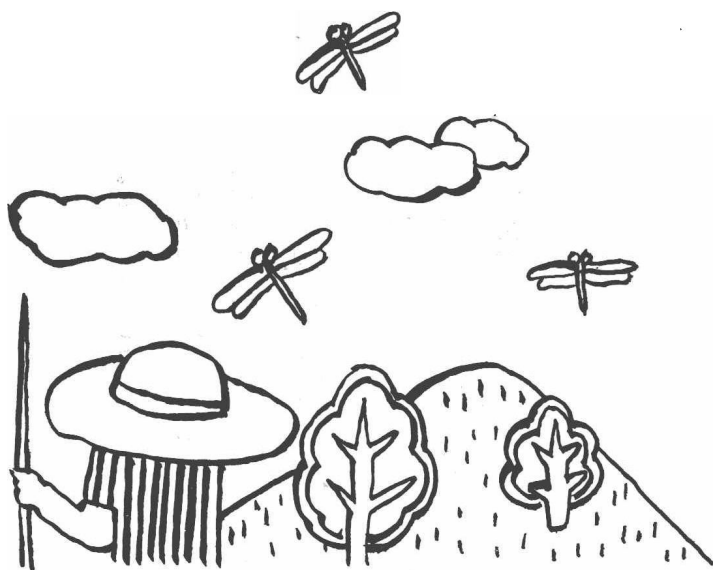
アメリカの「空の要塞」B 29が日本各地を爆撃するようになった昭和十九年、都市の学童たちは親許をはなれて、いなかの宿舎で勉強するようになった。これが集団疎開である。

当時、小学五年生のわたくしの住む東京・本郷区の友だちは、主として栃木県に疎開することが決められたが、やれ身体検査、荷物の積出しなどと、まるで出征兵士のような気持ちになり、この戦争に勝つまでは絶対やりぬくぞと心に誓ったものである。

こうして約一年半、父母と別れ、空腹とノミとの戦いが始まった。

昭和四十七年三月

明村 宏



■ もくじ

昭和十九年八月

九月

十月

十一月

十二月

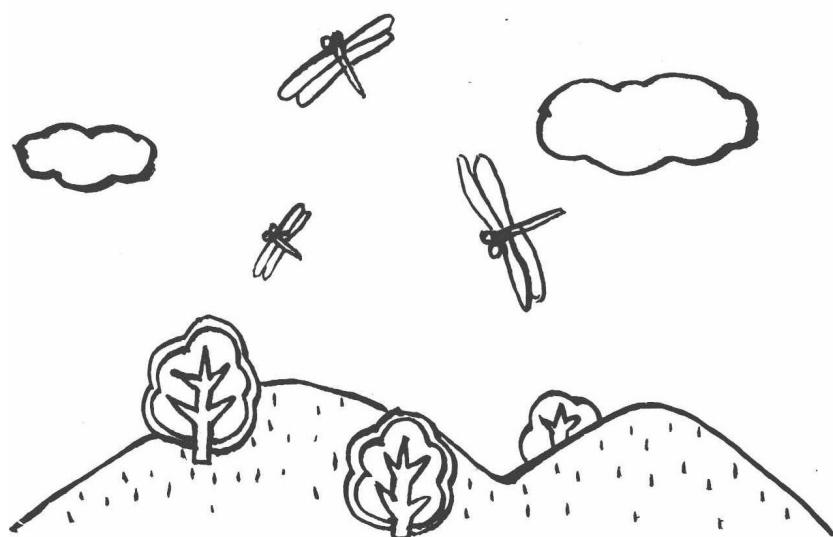
昭和二十年一月

二月

三月

四月

63 55 48 36 28 19 12 10 8



母への手紙

五月
六月
七月
八月

昭和十九年十月から

二十年七月までの献立表
こんだて

昭和十九年八月から

一年間のおもな出来事
できごと

178 156 148 128 107 88 73

装幀 中川由紀
なかがわゆき

さしえ 秋 玲二
あき れいじ

写真 三浦拓也
みうらたくや

毎日新聞(東京) 出版写真部

表紙写真ひようしやしんは那珂川風景なかがわふうけいと馬頭町近在ばとうまちきんざいの
農家のうか。裏表紙うらは馬頭町青年学校。文中
で、とくに注記ちゆきしていない写真しやしんは、毎
日新聞社の資料写真しりようしやしんです。文は、すべ
て現代かなづかいに直なおしてあります。

お父さんが子供で戦争のころ
〈学童疎開日記〉





昭和十九年

● 八 月

八月二十四日 晴

僕^{ぼく}たちは、お母さんや父兄の方々に見送られ駒込^{こまごめ}駅（東京）を出発した。汽車の中ではトランプや景色^{けしき}を見ている間に宝積寺^{ほうしやくじ}についた。烏山^{からすやま}線に乗り、四十分間ぐらいしたら目的地^{もくどき}についた。駅には富士前国民学校^{ふじまへこくみん}の生徒が迎えに来てくれていた。あとバスに乗り馬頭町^{ばとう}についた。町では国民学校（馬頭国民学校）の生徒が迎えに来てくれた。食べ物全部出した。それは、くさっているといけなからで、そのかわり、おこわ（赤飯^{せきはん}）をいただいた。

疎開して はじめて一夜 あかしたり

注Ⅱ馬頭町は栃木県那須郡^{なすぐん}の町で、東北本線宇都宮駅下車、五十メートルぐらい歩いて宮の橋^{はし}バス停^{てい}から東野^{とうや}バスの馬頭行に乘れば約一時間半で着く。あるいは宇都宮駅から烏山線に乗り烏山駅下車（約一時間）、国鉄バスの馬頭または常陸^{ひたち}大子行に乘れば、約四十分ぐらいで町に着く。



「大正十三年一月十四日写生 松井天山」の署名のある馬頭町古地図

八月二十五日 晴

僕は荷物をかたづけ、町内を見物した。初めはいなかの子供とけんかばかりしていたが、僕は中村君と藤田君とともに仲よくなった。釣りにいったが流れが早いので、まだ一匹もとれない。

八月二十六日 晴

まだ学校が始まらないのでゆっくりだった。今日は裏山へ登った。べつに家へ帰りたいという気持ちは一つもしなかった。が時々お母さんのことを思うとまなこがあつくなってきた。御飯をいただく時は男子が先で女子はあとだった。それは、というとおぜんがたらないからのことであつた。

八月二十七日 晴

今日初めて泳いだ。川の水なのでなかなか

か流れが急なのでうまく泳げなかった。途中とちゆうごろで、いなかの子供こどもが石を投げるので寮りようへ帰ってきた。僕達ぼくたちはしやうぎをして遊んだ。

● 九 月

九月一日 晴

中村君にやす（魚をさしてとるもの）をかりて山田君（五男）と武茂川に魚を取りにいったが、まだしんまいなので一匹ひきもとれなかった。

九月二日 晴

今日ようやく一匹とれたが、あんまり小さいので食べられなかった。

九月十三日 晴

今日まきを運んだ。初めてなので、もちかたもなんにもしなかった。僕はたった七わしか運ばなかった。いなかの子供がとも運ぶのにおどろいた。

九月十四日 晴

今日、学校がすむとすぐ先生について栗拾くりひろいにいった。五時半ごろ帰ってきたのでみんなは夕御飯ごはんを食べていた。今日、集団疎開しゅうだんそかい（空襲くうしゅうや火災かさいによる被害ひがいを少なくするため、都会の子供たち

は、いなかへ分散して授業を受けた）第三軍が到着した。

九月十五日

昨日、堤君（家の前に住んでいた同級生）が来たと思っていたら、こないで残念だった。堤君というのは、こっちに来る前、身体検査に合格しなかった友達なのである。

九月十八日 雨

僕は足におできが十五ぐらいできた。たまにはお母さんのことを思うと悲しくなってくるが、今、日本はどんなことをしているかと思うと、なんとも思わなくなる。

九月十九日

今日、一時ごろ警戒警報（敵の飛行機が近づいてくるけはいがあると、まず警戒警報に用心しなさいという知らせが出る。空襲警報は、敵機が、いよいよ近づいてきた知らせで、子供たちは安全なところへかくれた）が発令されたが馬頭町はとてもしょうであった。こんなことになると家のことが心配でたまらない。そんなことを考えていると解除になった。

九月二十二日 晴

今日は作業があった。それは着物にする材料で木の皮からとるせんい（こうぞ）で川原に多く生えているのである。いなかの子は「かま」などを持ってきたが僕はみんなナイフだった。

九月二十六日 雨

今日、学校から帰って来てからでんしよばとを飛ばしに行った。藤田君（地元の子）の家の山ばとを飼いなしたものである。

九月二十九日 雨

今日、馬頭国民学校で身体検査があり、体重は二八・〇九キロあった。少しやせたが山崎先生（東京にいる時の担任の先生で後続の生徒を引率して時々馬頭町にこられた）はこちらに来てからまずやせて、それからどんどんふとるのだといわれていたので、これからはふとるなあと考えた。

●十月

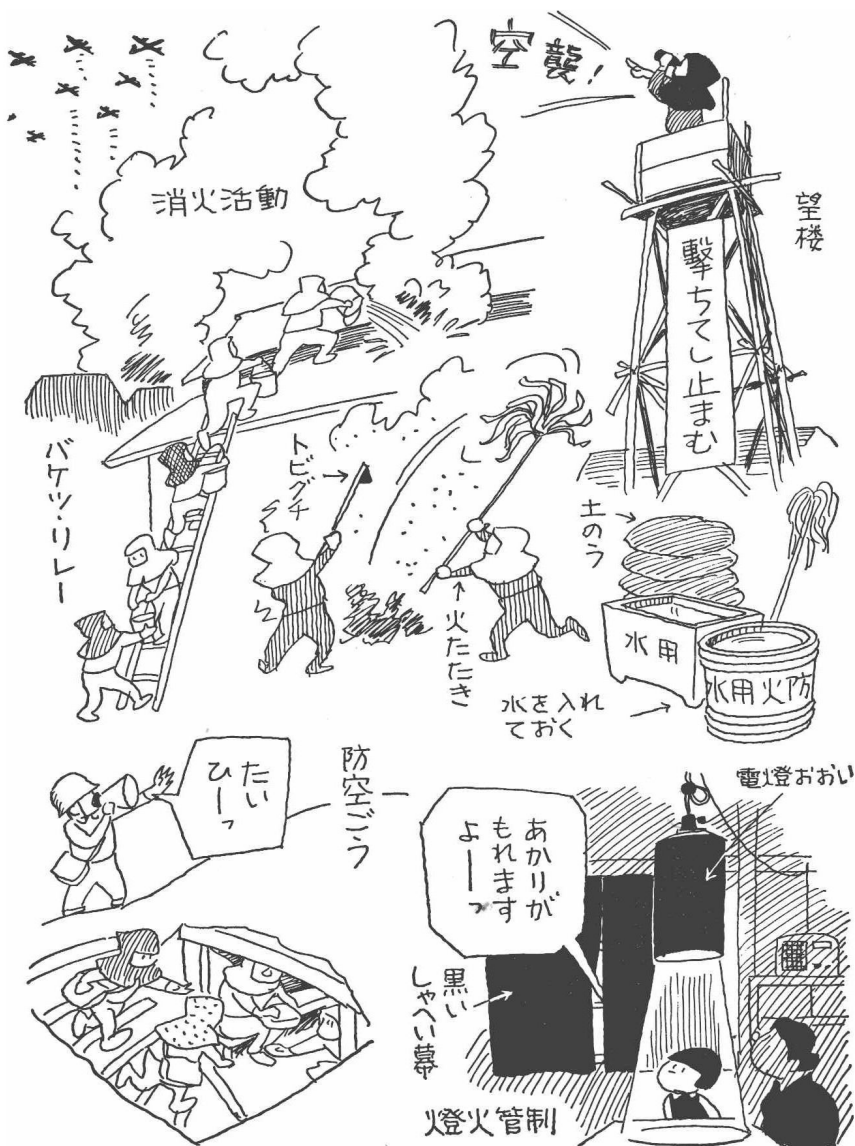
十月一日 雨

今日、栗拾いに行き約四百位とってきた。今日は十五夜お月様なので栗御飯だった。

十月三日 晴

いつも学校から帰って来て、いっとう楽しみなのは、家からのたよりが来ていることだ。このごろ家からたよりがないので心配だ。

十月四日 晴のち雨



警戒空襲警報・灯火管制

家の面会日は十月二十五日ときまり、僕をうれしがらせた。

十月六日 雨

今日僕は川へ行き、十二センチ位のなまずをしやくった。すい事場の人に焼いていただき三人でわけて食べた。三人でわけたのであんまり沢山ではなかったがおいしかった。

十月十一日

今日はとてもうれしくて、うれしくてたまらなかった。それは、あした小山君のお母さんと林さんのお母さんがいらつしやることなのであった（近所に住んでおられた）。

十月十二日 晴 小包

このごろだいぶ寒くなった。青年学校から帰ってくると（僕達疎開の生徒はここで授業をした）、小山君、林さんのお母さんがいらつしやった。おばさん達は、かき、ぱんなどを持ってきてくださった。

十月十三日 晴

今日、川の水があふれ、僕は釣りにいき五、六匹とってきた。やはり焼いていただき、上等でおいしい所を三匹、先生にけんじようした。先生は大変喜んでおられた。僕もよいことをしたのでうれしかった。

十月十四日 晴